

# 悠久の京を訪ねて Part IV

Vol.9



KYOTO

ARCHAEOLOGY CENTER

京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

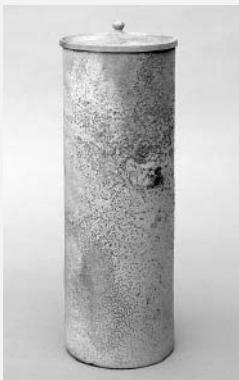
## 府指定文化財：大道寺経塚出土品

### ■ 経塚に託された人々の願い

経塚は、写経された法華経などの経巻を経筒などに納め地中に埋納した遺構です。奈良県吉野山の金峰山寺には平安時代の貴族が造った経塚が多数あり、その中でも、藤原道長が1007年に造営したものが現在、最古の経塚といわれています。

経塚の起源はよくわかつていませんが、釈迦が亡くなつた後、56億7千万年後に現れてこの世を救う弥勒菩薩の世に、經典や法具を伝えるために埋経することが本来の目的であったといわれています。平安時代後期、僧兵による鬪争や大火、疫病の流行に加え、悪のはびこる未法の世が到来したという末法思想が広まりました。このような社会背景のなか、経塚が盛んに造られました。

その後、経塚は、時代が変わるとともに、極楽往生や現世利益、追善供養などの人々の願いが加わり、少しづつ目的は変化していきました。



経塚に納められていた銅製の経筒

大道寺経塚



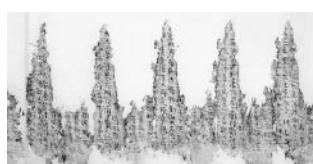
### ■ 発掘で見つかった経塚

京都府内では約150件の経塚が確認されています。

発掘調査では、須恵器甕など経筒を納めた外容器だけが出土することが多く、銅製や鉄製以外の経筒はほとんど残っていません。さらに経巻が残っているものはわずか十数例です。

昭和56年、福知山市大道寺跡の発掘調査において、鎌倉時代の経塚が見つかりました。経塚からは和鏡、檜扇、土師器・白磁の皿、北宋錢などが出土し、外容器の須恵器甕には竹製経筒2点と銅製経筒1点が納められていました。さらに銅製経筒の中には法華経8巻と阿弥陀経1巻が残っていました。甕の中に雨水がたまり、空気から遮断されたため奇跡的に残っていたと思われます。この経塚は、寺院に伴う古墓群に隣接することから、追善供養のために造られたと考えられます。大道寺経塚は、周辺の調査成果も含め、経塚を造った人々の思いや納められた経巻の実態を示す貴重な資料といえます。

なお、出土品は、昭和63年に府の有形文化財（美術工芸品）に指定されました。



発見された法華経